

新出資料 伏見天皇自筆自詠 広沢切

池田和臣

一 伏見天皇の和歌と書

鎌倉時代後期、後嵯峨天皇の皇子である後深草天皇（持明院統）と龜山天皇（大覚寺統）の間に皇位継承の争いがおこり、両統が交代で皇位につく両統迭立がおこなわれるようになった。龜山天皇・後宇多天皇と大覚寺統の天皇が続いた後、正応元年（一二八八）に後深草天皇の第二皇子である熙仁親王（ひろひと）が持明院統の天皇として皇位についた。これが伏見天皇（一二六五～一三二七）である。永仁六年（一二九八）讓位。後伏見天皇、花園天皇の時代、上皇として院政を執った。

政治的には、持明院統と大覚寺統の確執や、皇位継承に介入する鎌倉幕府との葛藤により、平穏とはいえない生涯であった。幕府に強い不信任感を持っていたため、倒幕画策の噂が立てられるほどであった。伏見天皇の和歌の師で一番の側近であった京極為兼が二度も流刑となっ

ているのは、伏見天皇が反幕府的な動きを取ったことに對する見せしめであるという見方もある。

しかし、文化面においては、和歌と書においては、特筆するにたる事績を残した天皇であった。『増鏡』第十五「浦千鳥」には、次のように記されている。

院の上さばかり和歌の道に御名高く、いみじくおはしませば、いかばかりかと思されしかども、正応に撰者どものことゆゑにわづらひどもありて、撰集もなかりしかば、いとど口惜しうおぼされて、

わが世には集めぬ和歌の浦千鳥むなしき名をや
跡に残さん

など詠ませおはしましたりしを、今だにと急ぎたたせたまひて、為兼大納言承はりて、万葉よりこなたの歌ども集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集とぞい言ふなる。この為兼の大納言は、

為氏大納言の弟に、為教の兵衛督といひしが子なり。限りなき院の御覚えの人にて、かく撰者にも定まりにけり。そねむ人々多かりしかど、障らんやは。この院の上好み詠ませたまふ御歌の姿は、前藤大納言為世の心にはかはりてなむありける。御手もいとめでたく、昔の行成大納言にもまさりたまへるなど、時の人申しけり。やさしうも強うも書かせおはしましけるとかや。

（日本古典文学全書『増鏡』による）

伏見天皇は東宮時代から、京極為兼を師として、新風の和歌をめざした文芸サロンを営んだ。これが京極派歌壇である。京極派の和歌は、後に、為兼を撰者に第十四番目の勅撰集『玉葉和歌集』として結実する。伏見天皇自らも優れた京極派歌人として活躍し、膨大な自詠歌の自筆草稿を残している。この断簡が広沢切である。

また、伏見天皇は鎌倉期随一の書の達人でもあった。

その仮名は王朝風であり、『増鏡』が「昔の行成大納言にもまさりたまへる」と賛美しているように、伏見院流の書として広まった。『入木抄』は次のように記している。

伏見院御筆、近來さかりに之を賞翫奉る。なかんず

く仮名は一向その様也。このかなも法勝寺関白以来、照念院関白の筆体也。これを摸されて、御天骨にてあそばし出されたる也。真名は佐跡を摸さるか。

（岩波文庫『入木道三部集』により、私に漢文表記を読み下し、濁点を付し、旧字体の漢字を新字体に改め、一部漢字を平仮名に改めた）

すなわち、「伏見院の筆跡は近年とても尊重されている。なかでも仮名は皆がその書風を書くようになった。

仮名の書風は藤原忠通、鷹司兼平の仮名をまなび習い、生まれもった自分の筆跡のような書風を作られたのだ。

漢字は藤原佐理の筆跡をまなび習ったようだ。」という。

平安末の藤原忠通の法勝寺流、それを継承して鎌倉時代をとおして流行したのが藤原良経の後京極流であった。そして、これらの縦長で鋭く切れのよい書風を引き継ぎつつ、それを平安風の端正にして温雅な書風に立ち戻らせようとしたのが、伏見天皇であった。ちなみに、天下の名品、伝小野道風筆秋萩帖、藤原行成筆白樂天詩巻、伝紀貫之筆桂本万葉集などは、伏見天皇の遺愛の品であった。

しかし、伏見天皇の仮名が平安風の仮名だといっても、冷静に客観視すれば、それとは本質的に異質である。名筆であることには違いないが、下れる世の時代性を覆い

隠すことはできない。同時代の藤原実兼の書に非常によく似ている。また、広沢切は江戸時代には、伏見天皇の皇子である後伏見天皇の筆跡とされていたが、それはこの父子の筆跡がとてよく似ていたからである。つまり、伏見天皇の書も、書の時代性から自由ではなかったということであろう。

ただし、広沢切が草稿を書いた日常的書風であるのに対して、伏見天皇の書として名高いもうひとつの筆跡、筑後切『古今集』『後撰集』『拾遺集』の断簡は、美的洗練をめざして書かれた清書体である。こちらは細く伸びやかな筆線で、かなり平安風の雰囲気を漂わせている。とにかくに、広沢切も筑後切も鎌倉期の仮名の名筆であることには違いない。

二 広沢切の新出断簡

先に述べたように、広沢切は伏見天皇が京極派歌人として詠んだ膨大な和歌の、自筆草稿の断簡である。近年、『伏見院御集』〔広沢切〕〔伝本・断簡集成〕〔久保木哲夫・別府節子・石澤一志・久保木秀夫編 笠間書院 二〇一一年〕が上梓され、広沢切の集成がなされたが、それ以後も広沢切の新出は続いている。つまり、いまだ知られていない新たな伏見院の歌が発見されているのである。ここに紹介する断簡（架蔵）にも三首の新出和歌が見いだせ

る―その他、これまで江戸初期の写本でしか知られていなかった二首、および『新千載和歌集』に見える一首、計六首の和歌が記されている―。

新出断簡は縦三〇・六センチ、横四七・六センチ。料紙に横皺および裏写りの墨痕があることから、もとの形は反故紙の裏を使用した卷子本と推される。ただし、前の三首と後の三首の間に折り目があり、それを中心に左右対称の虫食い跡が点在するので、卷子本が切断され、袋綴じに改装されていた時期があったようだ。また末尾の余白が広いが、歌題の一字が擦り消された跡がある。本来は歌が続いていたものを、軸装にする際、見栄えを良くするため擦り消されたとおぼしい。

葛木山

かつらきやはなさくみねのあさほらけ
よその空まてにほふしくも

志賀浦

しかのうらやよせくる浪もしろたへに
はなふきおろすひらの山かせ

田籠浦

たこのうらやうらむらさきのふちなみの

かへるや春のいろもとまらず

庭春雨

はるさめのふるきみとりのにはのこけ
かはらぬいろも時はわきけり

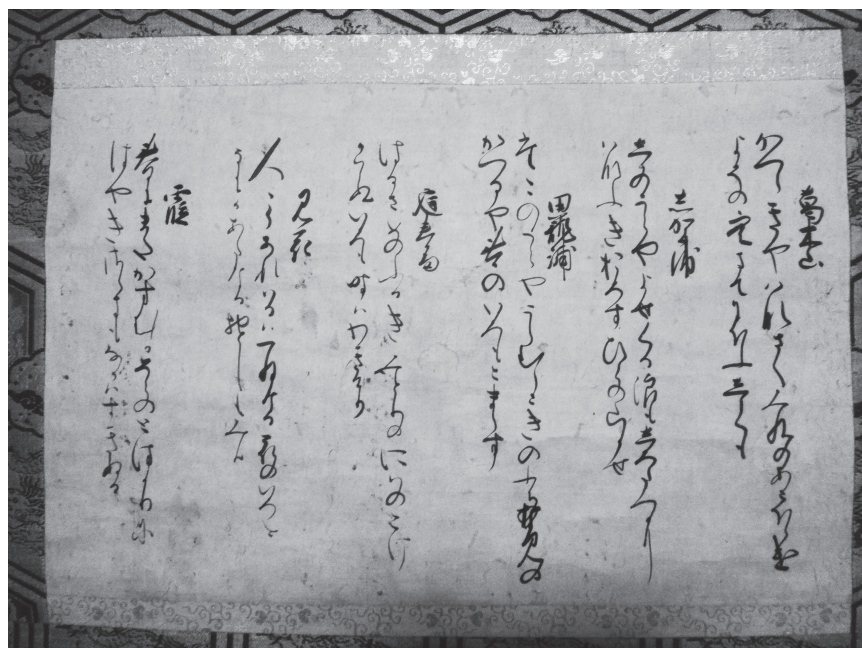
見花

人こそあれはるはつねなる花のいろを
なにかあたなる物としもみむ

霞

春にまたかすむかそらのとはかりに
はやきさくきもなはすきぬる

一首目、新編国歌大観・私家集大成・『伏見院御集』〔広沢切〕伝本・断簡集成』に見えない。伏見院の新出歌である。一部表現が重なる歌として、『延文百首』藤原公清詠の冬十首中に、「かづらきやたかねの雲をたよりにてよその空までしぐれふるなり」がある。『延文百首』は、後光厳院による応制百首で、一三五六年の成立。伏見院の歌の春を冬に変奏した本歌取りの歌であろう。桜の花の咲く峰がほのぼのと明るくなると、峰のむこうの空にかかる白雲まで桜色をおびて匂うようだ。「あ



けぼの」から「朝ぼらけ」への微妙な時の推移のなか、峰の桜の色が離れた白雲に投影するこまやかな景の妙味が表現されている。

二首目、やはり新編国歌大観・私家集大成の伏見院集・『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』に見えない。ただし、『新千載集』一五七番歌に伏見院御製として見える。しかし、伏見院自筆広沢切としては新出である。

三首目、これも新編国歌大観・私家集大成・『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』に見えない。伏見院の新出歌。ちなみに、「うらむらさきのふちなみ」という表現は、藤原家隆にある(『夫木和歌集』二一七八番歌「咲きかかるうらむらさきの藤浪をみどりにかへすまつのうら風」)。家隆の「藤の花」を「浪」に見立てた趣向を、伏見院は「浪」そのものとして詠っている。家隆の歌を意識してひねりを加えたとおぼしい。また、「いろいろとまらず」という表現は伏見院の他の歌にも見える。「東山御文庫蔵後伏見天皇宸翰御詠歌式百」(新編国歌大観七巻伏見院御集一六五番歌・私家集大成五巻伏見院御集一六五番歌として収載)にある「ひかずをばやよひのはるにおきながら花はなごりの色もとまらず」である。膨大な伏見院の歌には、同じ発想・表現の歌がままた見られる。紫色の藤の花のような波が寄せては返る、そこにはもう春の海の色はない。季節の移ろいによる景の変化を凝

視する目、京極派独特の新感覚が感じられる。

四首目、これは「宮内庁書陵部蔵伏見院御製百首」(袋綴の江戸初期写本)の一五番歌として見える。新編国歌大観七巻伏見院集一九七七番歌、私家集大成五巻伏見院集一九八九番歌として収載されている。しかし、伏見院自筆広沢切としては新出。

五首目、これも「宮内庁書陵部蔵伏見院御製百首」(袋綴の江戸初期写本)の一六番歌として見える。新編国歌大観七巻伏見院集一九七八番歌、私家集大成五巻伏見院集一九九〇番歌として収載されている。しかし、伏見院自筆広沢切としては新出。

六首目、新編国歌大観・私家集大成・『伏見院御集「広沢切」伝本・断簡集成』に見えない。伏見院の新出歌である。

ちなみに、新編国歌大観七巻伏見院集、私家集大成五巻伏見院集でも、五首目の歌「人こそあれ」に続いて、「霞」の歌(一九七九番歌、一九九一番歌)が載るが、それは「おもへどもいけみぬはるのかすみのみまたへだてぬるかすがののはら」で、本断簡の六首目の歌とは異なる歌である。

空にかかる春がすみの隙間からわずかに見える早咲きの桜、それももう満開を過ぎてしまっている。この歌をふくめ、伏見院の新出歌三首は、いずれも、自然の微細

な観察により、微妙な自然の変化の美をとらえた、京極
派らしい和歌である。